

## ●第二部

【筆法伝授】後の世のため筆法を伝授せよとの勅諭を賜った菅丞相(仁左衛門)は、七日間館に籠って伝授の準備を進めています。数多い弟子の中でも古株の左中弁希世(東蔵)は伝授されるのは自分と決め付け、局の水無瀬(吉之丞)を仲立ちに丞相に清書を見てももらいますが、腰元の勝野(新悟)に悪戯するなど、その器量ではありません。そこへ武部源蔵(梅玉)が女房戸浪(芝雀)を伴い訪れます。幼い頃から菅家に仕えていた源蔵は、四年前不義の科で勘当されましたが、源蔵をおいて他になしと、丞相が館へ召し出したのです。園生の前(魁春)にひれ伏す源蔵夫婦でしたが、やがて源蔵一人が御学問所へ召されます。希世の邪魔だてもものともせず、見事に書き上げたその手跡に丞相は満足し、源蔵に伝授の一卷を与えます。そこへ内裏から参内の勅諭。丞相は解せぬまま支度を調べますが、冠が落ちたことから不吉を予感します。館を離れる源蔵夫婦と入替りに変事を伝えるに来たのは、菅家の舎人梅玉丸(歌昇)。間もなく丞相は、『三善清行(秀調)や荒鳥主税(松江)ら時平方に囲まれて戻って来るのでした。』道明寺』につながる悲劇の始まりとなる一幕です。